

佐久埋蔵文化財調査センター報告書第7集

高師町遺跡群

TAKA SHI MACHI
高 師 町

西大久保遺跡群

NISHI OHO KU BO
西 大 久 保

長野県佐久市 安原 高師町遺跡 発掘調査報告書
上平町・下平尾・西大久保遺跡

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は昭和61年度市道東中学校牧場線建設工事事業、平根南北線（高速道北部Ⅰ区）建設工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 佐久市土木課
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地籍
高師町遺跡
佐久市大字新子田1368-1
西大久保遺跡
佐久市大字上平尾 739-1・2、742-1・2、下平尾 437-1・2、435、438、434
444、448、449、454、456、459-1、460-1、464-1・4、465-1、470、552、
562-1、564-1、582、586-1、587、588、589、590、603-1、604-1~6、
607、609、610、611、631-1・2、1246、
- 5 調査期間及び面積
高師町遺跡
昭和61年8月27日～9月8日、昭和61年9月9日～昭和62年3月18日 668㎡
西大久保遺跡
昭和61年10月2日～12月2日、昭和61年12月3日～昭和62年3月18日 7500㎡
- 6 調査団の構成
事務局
佐久埋蔵文化財調査センター
所 長 西沢 正巳
庶務係主任 轟山 俊彦
庶 務 係 高橋 純子
調査団
高師町遺跡
団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）
調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）
羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 小山 岳夫 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係)
調査 主任 羽毛田伸博 (佐久考古学会員)
調査補助員 神部妙子、橋詰勝子、藤原浩江 (佐久考古学会員)
発掘協力者 小林幸子、浅沼ノブ江、市川香里、平林美津江、宮川百合子、
高橋牛次郎、高橋ふさ
整理協力者 小林幸子、平林美津江
地形・地質・石質指導 白倉盛男 (佐久考古学会副会長)
遺物 写真 島山 俊彦
遺構 写真 小山 岳夫

西大久保遺跡

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)
調査担当者 三石 宗一、小山 岳夫 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係)
調査 主任 羽毛田伸博 (佐久考古学会員)
調査補助員 橋詰 信子、藤原 浩江
発掘協力者 遠藤マサヨ、大工原春巳、藤牧千恵子、藤牧ユリ、藤本淑江、
細萱ミスズ、依田みやこ
整理協力者 宮川百合子
地形・地質・石質指導 白倉盛男 (佐久考古学会副会長)
遺物 写真 島山 俊彦
遺構 写真 三石 宗一

- 7 本書の編集は三石、小山が行い、執筆は第11章第1節を白倉盛男が、第2節を黒岩忠男が担当し、他の章については三石、小山がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 8 本書及び高師町・西大久保遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において上平尾区長中沢一郎氏、下平尾区長大工原賢太郎氏、東中学校、並木昭也氏、他、地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

市川隆之、白田武正、島田恵子、堤 隆、花岡 弘、原 明芳、福島邦男、由井茂也

(敬称略五十音順)

凡 例

- 1 本書は、事業年度等の関係から限定された期間内での、迅速な刊行を基本的編集方針とし、調査により検出された遺構、遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限分かりやすく記録することに努めて作成した。
- 2 遺構の記述については、検出位置→検出層序→重複関係→平面形態→覆土→付属施設→遺物の出土状態→その他の観察事項の順序で記載することを基本とした。
- 3 遺構の略称
 竪穴状遺構→T a、特殊遺構→T、柱穴址→柱、土坑→D、溝状遺構→M
- 4 水系レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 5 挿 図

1) 重複遺構については、上端のみを実線で表示した。

2) 縮 尺

 竪穴状遺構・溝状遺構→1/80、特殊遺構→1/40、土坑→1/60、土器→1/4、石器→1/3

 写真図版中の土器の縮尺についても、上記に準拠する。

3) 遺構・遺物実測図に用いたスクリントーンは下記の内容の表現である。

遺構実測図

地 山 

砂 

遺物実測図

土器器内面黒色研磨 

須恵器断面 

目 次

例 言

凡 例

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査日誌	2
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 西大久保・高師町遺跡群付近の自然環境(地形・地質)	3
第2節 遺跡の歴史的環境	6
第III章 基本層序及び概要	9
第1節 基本層序	9
第2節 検出遺構・遺物の概要	11
第IV章 高師町遺跡の遺構と遺物	15
第1節 竪穴状遺構	15
1) 第1号竪穴状遺構	15
第2節 特殊遺構	16
1) 第1号特殊遺構	16
2) 第2号特殊遺構	19
第3節 柱穴址	23
1) 第1号柱穴址	23
第4節 土坑	23
1) 第1号土坑	23
2) 第2号土坑	24
3) 第3号土坑	24
第5節 溝状遺構	25
1) 第1号溝状遺構	25
2) 第2号溝状遺構	25
第6節 グリッド・表採遺物	26
第V章 西大久保遺跡の遺構と遺物	27
第1節 土坑	27
1) 第1号土坑	27
第2節 風倒木址	27
第3節 表採遺物	29

第VI章 調査のまとめ

第1節 高師町遺跡	30
1) 遺構	30
2) 遺物	31
第2節 西大久保遺跡	36

引用参考文献

写真図版

挿 図 目 次

第1図 高師町遺跡・西大久保遺跡の位置	1	第15図 第1号柱穴実測図	23
第2図 深堀トレンチ地層断面図	5	第16図 第1・2号土坑実測図	24
第3図 周辺遺跡分布図	7	第17図 第3号土坑実測図	24
第4図 高師町遺跡基本層序模式図	9	第18図 第1号土坑出土土器拓影図	24
第5図 西大久保遺跡C区南側基本層序模式図	10	第19図 第1号溝状遺構実測図	25
第6図 西大久保遺跡D区中央付近基本層序模式図	10	第20図 第2号溝状遺構出土石器実測図	25
第7図 高師町遺跡全体図	11	第21図 第2号溝状遺構実測図	26
第8図 高師町遺跡発掘区設定図	12	西大久保遺跡	
第9図 西大久保遺跡の地形及び発掘区設定図	13	第22図 第1号土坑実測図	27
高師町遺跡		第23図 第1号風倒木址実測図	28
第10図 第1号型穴状遺構実測図	15	第24図 第2号風倒木址実測図	28
第11図 第1号特殊遺構実測図	17	第25図 第3号風倒木址実測図	28
第12図 第1号特殊遺構出土土器実測図	18	第26図 西大久保遺跡表層石器実測図	29
第13図 第2号特殊遺構出土土器実測図	20	第27図 佐久地方の集書土器	32
第14図 第2号特殊遺構実測図	21		

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	8	第3表 高師町遺跡第2号特殊遺構出土土器観察表	20
第2表 高師町遺跡第1号特殊遺構出土土器観察表	18	第4表 佐久地方の集書土器出土遺跡、遺構一覧表	33

図 版 目 次

図版 一 高師町遺跡群・西大久保遺跡群付近航空写真	図版 三 1	第1号特殊遺構遺物出土状況
高師町遺跡	2	第1号特殊遺構遺物出土状況
図版 二 1 高師町遺跡全体写真	3	第1号特殊遺構出土土器
2 第1号特殊遺構	4	第1号特殊遺構出土土器

- | | | | | | |
|------|---|---------------|------|---------------|-------------|
| | 5 | 第1号特殊道槌出土土器 | | 3 | 第2号土坑 |
| | 6 | 第1号特殊道槌出土土器 | | 4 | 第3号土坑 |
| | 7 | 第1号特殊道槌出土土器 | | 5 | 第1・2号溝状道槌 |
| 图版 四 | 1 | 第2号特殊道槌 | | 6 | 第2号凹状道槌出土石器 |
| | 2 | 第2号特殊道槌遺物出土状況 | | 西大久保遺跡 | |
| | 3 | 第2号特殊道槌遺物出土状況 | 图版 七 | 1 | A地区全景 |
| 图版 五 | 1 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 2 | B地区全景 |
| | 2 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 3 | C地区全景 |
| | 3 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 4 | D地区全景 |
| | 4 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 5 | 第1号土坑 |
| | 5 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 6 | 第1号風倒木址 |
| | 6 | 第2号特殊道槌出土土器 | | 7 | 第2号風倒木址 |
| 图版 六 | 1 | 第1号壑穴状道槌 | | 8 | 第3号風倒木址 |
| | 2 | 第1号土坑 | | | |

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

高師町遺跡は佐久市新子田に所在し、南北に縦走する佐久地方特有の田切地形に挟まれた台地上の左岸にあり、一方、西大久保遺跡は高師町遺跡よりも約 1 km 北方の佐久市上平尾・下平尾に所在し、同じ田切りの右岸上に存在する。両遺跡は市内詳細分布調査によって、平安、縄文～平安時代の遺物が採集されており、それらに伴う遺構の存在が予想されている。

今回、佐久市土木課が行う昭和 61 年度高速自動車道関連事業の一環として市道東中学校牧場線及び市道平根南北線建設工事事業が両遺跡内で計画され、遺跡の破壊がやむなきに至った。市教委、土木課協議の結果、記録保存を前提とした発掘調査が行われることとなり、市教委から委託をうけた、佐久埋蔵文化財調査センターが現地調査、整理調査を行う運びとなった。



第 1 図 高師町・西大久保遺跡の位置 (1:50,000 国土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

高師町遺跡

8月27日(水)

器材搬入。

8月28・29日(木・金)

重機にて表土除去作業を行う。

プラン確認作業を行い、遺構掘り下げ開始。

9月2・4日(火・木)

Ta1、M2、D1・2、T1・2の掘り下げを行う。

9月5・6日(金・土)

遺構の掘り下げ継続する。

セクション図、平面図、エレベーション図等の図面を作成する。

9月8日(月)

T2の平面図作成、遺物取り上げ。

全体写真撮影。

器材撤収。発掘調査完了。

昭和61年9月9日(火)～昭和62年3月31日

(火)

報告書作成作業を行い全調査を完了する。

(小山)

西大久保遺跡

今回、調査区が幅約10m、長さ約750mと南北に長い
ためグリッドの設定は行わず、北側よりA・B・C・Dの4区に分けて調査を行った。

10月2日(木)～18日(土)

重機にて表土除去作業を行い、併行してプラン確認作業を行う。遺構の存在が薄いと考えられるA区・B区はトレンチを2本入れて確認する。6日(月)より廃土はダンプで運搬する。

11月4日(火)～10日(月)

プラン確認作業、セクション図の作成を行う。

11月11日(火)～15日(土)

D1・風倒木址の掘り下げ・実測・写真撮影、各区の全体図作成・写真撮影、器材撤収を行ない発掘調査を終了する。

12月1日(月)・2日(火)

重機により調査箇所を埋め戻し作業を行う。

昭和61年12月3日(水)～昭和62年3月31日

(火)

報告書作成作業を行い全調査を完了する。

(三石)

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 西大久保・高師町遺跡群付近の自然環境 (地形・地質)

1) 地 形

今回発掘調査を行った西大久保遺跡群・高師町遺跡群は佐久市内の湯川左岸平尾富士（市民の森）南麓にひろけた河岸小平地上の平根・三井地区に立地するもので、両遺跡は南北直距離1kmの平坦地面上地続きであり、その平坦面の地形・地質学的景観成因は同一のものである。従って今回の二遺跡の自然環境については同一地域として記載する。

上信国境に聳ゆる浅間山は標高2560m、わが国の代表的な活火山で国立の常時火山活動状況を観測する施設を有する四つのA級火山の一つに分類されている。浅間火山は溶岩流・火山弾・火山砂・浮石・火山灰などの火山噴出物が互層する成層火山で、現在の最高地点噴火口は黒斑火山・前掛火山の上部中心に形成されたものでこれらを含めて浅間山全体は模式的な三重式成層火山である。

この浅間山は古くから親しまれ、恐れられ佐久全地域に格別自然・歴史人類生活の上に偉大な影響を及ぼしてきたが、現在では火山・地質等の地球物理学上から日本だけでなく、世界的にも広く知られてきている。その理由は次の三点に要約できる。

- ① 活火山浅間山は地形・地質構造・火山活動・火山形態（成層・橋状・溶岩円頂丘等）などの各面から各種の火山としての条件を兼備しており、火山の模型的存在で、火山研究には最も適しており興味深いものがある。
- ② 古代からの噴火活動の古記録が残されており、火山活動の歴史的研究では世界的に珍らしいとされている。ことに天明3年（1783）大噴火の記録は、文書・絵図・日記・書信などこの地方にも多く残されている。
- ③ 火山活動の地球物理学的研究が、日本では勿論、世界的にも最も早くから行われ、その成果が日本の火山学・地震学を進歩させる原動力となっており、世界的にも高く評価されている。

当遺跡はこの浅間山の南斜面山麓が佐久平の平坦面に交ってゆるやかな南傾斜の続く標高700～730m附近の湯川の東沿岸の台地上に立地している。湯川は軽井沢町千ヶ滝に源を発し、南流して、同町油井部落で南軽井沢から西流して来る泥川と合流して流路を西に変え、御代田町に

入るまでに北の浅間山麓・南の森泉山方向の両側の小支流を合わせて水量を増し、深い浸蝕峡谷を作って流路を西北に変え、湯川ダムの多目的大貯水を作り、佐久市横根部落北方で再び流路を南に変えて佐久市内に入ると横根附近から河幅も広め兩岸に浸蝕河岸段丘を作り、谷中に小沖積地を作り、最も古い開拓水田がそこに拓かれている。当遺跡群はこの湯川東岸台地上にある。

湯川西岸佐久平地区（岩村台地）には火山山麓特有な田切地形が見事に発達している。これは新しい火山浅間山の火山噴出物火山砂・火山灰・浮石の堆積層（追分第一軽石流＝P1）の末分解で粘土化せず凝結力が誠に乏しいため流水・洪水等の浸蝕に対する抵抗力が頗る弱く一度流路となると大きな断面が垂直に近い谷を発達させる可能性が多く、火山国日本の第四紀の新しい火山の裾野地帯各地に見られる田切地形となるのである。御代田駅から小海線三岡駅附近がこの田切り地形が最も顕著に見られる。湯川東岸地区には田切地形の著しいものは少ないが当遺跡の東側の旧平尾道・安原用水・東中学校東側凹地・霞川等の凹地が田切地形の初期のものである。これらの初期田切地形間の南北に続く小高地台地が弥生時代以来古墳時代古代中世の住居遺跡群の分布地となっている。

湯川は岩村田南方で西流に転じ谷幅を広め、谷中段丘も形成して落合で千曲川に合流している。

2) 地質

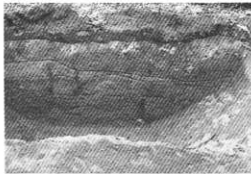
本遺跡地周辺の地質構成で野外で直接観察できる最も古いものは平尾山（1155m）を構成している平尾山溶岩である。平尾溶岩は塊状火山（トロイデ火山）として噴出した淡青色緻密な玻璃質複輝石安山岩で全山を構成しており、この岩石は石材として頗る良質で古くから利用され“佐久産小松石”と呼ばれて他地方にも移出されている。荒船火山より古い時代の噴出物で長い間の風化浸蝕をうけて平尾山は山全体に放射谷が発達し、佐久平の東北隅に屹立した富士山型を示し山頂からの展望も広く、登山道も拓かれて佐久市民の森として親しまれている。

平尾山の東麓を被い重なっているのが荒船火山の噴出物の溶結凝灰岩（佐久石）で霞川左岸・安原・新子田附近・關流山の奇岩絶壁以東、荒船山を中心とした佐久平東縁山地一帯に広く分布している。佐久石と称せられているものの中で特に業者間では安原部落周辺産のものを“安原石”と呼びこれが最良であるとされ古くから佐久地方一帯の石造文化財の原材料として珍重されてきた。この溶結凝灰岩は荒船火山活動の最盛期に多量の安山岩質灼熱火山灰を多量に長期間連続噴出し、厚い堆積層を構成し熱と加重圧によって再溶融固結したもので、荒船火山を中心として志賀谷山峡の奇岩・内山峡・田口青沼まで広く分布しているもので安原石は堆積再凝固の状態が特に良好であったものであろう。

堆積岩としては英田神社南の香坂越尾根南部に小部分に砂質凝灰岩・凝灰岩の互層があり、植物化石を産することから洪積層下部相浜層に対比されるが、この地層の分布と化石については

今後の再調査が期待されている。

安原・新子田・平根地区の平坦地を構成する地層は浅間火山の噴出物の堆積層で基盤は黒斑火山の噴出物起源の湖沼性堆積物の火山性砂岩・凝灰岩・凝灰質礫岩が互層して湯川べり谷底部に一部露出が見られ、昭和61年度の黒岩城埋文調査の際に深堀トレンチでも確認された。その上部には浮石の大小礫を多量に含んだ火山灰砂の厚い層が不整合に重なっている。この層は追分第一軽石流と呼ばれているが前掛火山の噴出物で浅間火山の南斜面中部以下大部分と平坦地佐久平北半を広く被っている。空中堆積物であるので原地形による堆積物の厚さの変化が著しいことがこの層の特徴ともなっている。この地層分布区内には田切地形がよく発達し、その崖面で構成物質や層厚が観察できる。当遺跡近くの好露出は西方約1kmにある湯川べり鼻顔稲荷神社附近の断崖で約20mの断面が観察できる。この軽石流は大別して2回にわたって噴出したもので第2回目の第2軽石流は当地域より西部小海線中佐都駅より西部、小諸市懐古園附近まで厚く第一軽石流



第2図 深堀トレンチ地層断面写真

上に重なっている。第二軽石流層の中には炭化木炭が含まれることが多く、この炭化木幹についてC14年代測定では10,650-11,300年前と測定値が出ていると小諸市誌自然編に記載されている。

この第一軽石流堆積面最上部の成層状態は西大久保遺跡深堀トレンチで確認したのが、写真に示した地層断面であり不規則な空中堆積であることが見られる。これについては層序の項を参照されたい。
(白倉盛男)

第2節 遺跡の歴史的環境

高師町遺跡群高師町遺跡は、佐久市新子田地籍の浅間火山灰堆積物による平地が幾つかの田切りによって区切られた標高710m内外の南北に細長い台地上に位置し、西大久保遺跡群西大久保遺跡はそこから約1km北方の佐久市上平尾、下平尾にまたがる高師町遺跡と同様な台地上に位置している。

湯川左岸、平尾富士山麓南西に広がる台地は、埋蔵文化財の散布密度が濃く、西大久保遺跡の約1km北方には、横根の30余基を数える群集墳（塚原・上の原・上長坂・十二平・輪子等の古墳群）、上平尾の30基を数える群集墳（矢口・平・腰越・矢沢・城・宿・塚畑等の古墳群）、東側に近接して下平尾群集墳（一本松・丸山・湯流等の古墳群）、安原棧敷古墳、玄室に側室のある安原大塚古墳、西方に新子田四ツ塚古墳、安原蛇塚古墳等が点在している。

また、両遺跡の東側には大角遺跡(50)、東村遺跡群(47)、筏室遺跡群(48)、戸屋敷遺跡群(46)、戸坂遺跡群(20)、新子田神明の木遺跡(59)、権現平遺跡(54)、宿上屋敷遺跡(5)、下川原・光明寺遺跡(6)等、西方には蛇塚遺跡群(13・14)、下小平遺跡(10)、上小平遺跡(42)等の遺跡群が両遺跡をとりまくように分布している。尚、前年調査された筒畑遺跡群池畑遺跡、猫久保遺跡群西御堂遺跡(3・4)は高師町・西大久保両遺跡に、はさまれるように分布している。これらの遺跡地からは、分布調査により縄文から古墳時代に至る時代幅の広い遺物が採集されているが、発掘調査により確認された遺跡はいまだ少ないのが現状である。

周辺遺跡を時代別にみると、安原池前遺跡、下平尾の山伏木遺跡では、多量の縄文中期の遺物が出土している。弥生時代では、新子田の戸坂遺跡(22)で後期の住居址が1棟検出されている他に、高坪・壺等豊富な遺物が出土している。和田上南遺跡では、中期後半の住居址等5棟が検出され、和田上遺跡(64)は弥生中・後期の土器等が多量に表採されていることを勘案すると、その周辺に大集落の存在が予想される。また、湯川左岸池畑遺跡西方に位置する下小平遺跡(10)は、昭和55年度に発掘調査が実施され、ベッド状遺構を有するものも含め住居址5棟・方形周溝墓2基、他に壺・甕・台付甕・高坪・坪・甕等の土器とともに土製紡錘車・鉄器・石器等豊富な内容の遺物が検出されている。

弥生末から古墳初頭では池畑遺跡から該期の住居址2棟が検出され、当地方の弥生土器・土師器の研究に新たな問題を提起した。

古墳時代では昭和60年度調査の宿上屋敷遺跡(5)で古墳時代前期の住居址2棟、昭和46年度調査の戸坂遺跡では古墳時代後期の住居址4棟と高坪・甕等の土器が検出されている。これとほぼ同時期と考えられる古墳として棧敷古墳・蛇塚古墳・和田上古墳などが存在する。平安時代では猫久保、上小平、蛇塚A・B、戸坂、和田上遺跡等が所在する。これらのうち蛇塚B遺跡は昭



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000国土地理院地形図による)

和54・58・59年の三次にわたり調査が実施され、住居址23棟が検出されており、相当規模の平安時代の集落が展開されていたことが予想される。また、池畑遺跡では祭祀色の強い土坑、宿上屋敷遺跡では住居址2棟、戸坂遺跡では住居址4棟と多量の墨書土器が検出されている。

中世では60年度調査の下川原・光明寺遺跡から、14～15世紀と考えられる竪穴状遺構、溝状遺構、土坑が検出され、安養寺との関連も想定されている。

佐久盆地の平坦部の北東にあたる湯川左岸、霞川、志賀川流域等の安原・新子田地域は近年調

第1表 周辺遺跡一覧表

No	区分No	遺跡名	所在地	立地	時代					備考	
					縄	古	奈	平	中		
1	129	高師町遺跡	新子田字高師町	河原段丘					○	本調査	
2	47	西大久保遺跡群	上平尾・下平尾	河原段丘	○	○			○	本調査	
3	130	筒相遺跡群	安原字筒相・沼澤・下池 新子田字田端	台地	○				○	S60年度発掘調査(法華遺跡)	
4	128	備久保遺跡群	安原字備久保・西御堂	#					○	S60年度発掘調査(西御堂遺跡)	
5	133	宿上屋敷遺跡	安原字上屋敷	#					○	S60年度発掘調査	
6	135	下川原・光明寺遺跡	安原字下川原・光明寺	扇形地					○	S60年度発掘調査	
7	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	台地	○				○	S55年度発掘調査	
8	51-1	王城跡	岩村田字古城	#	○	○	○	○	○	S54年度一部発掘調査	
9	51-2	石並城跡	岩村田字石並	#	○	○	○	○	○		
10	51-3	黒岩城跡	岩村田字古城	#	○	○	○	○	○	S55・59年度一部発掘調査	
11	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	段丘	○	○	○	○	○	S55年度発掘調査	
12	126	蛇塚古墳	安原字蛇塚	台地		○				S57年度発掘調査	
14	113	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚・西大久保 北御堂・南御堂	#					○		
14	120	蛇塚B遺跡群	新子田字蛇塚・内池・北野馬久保 野馬久保	#					○		
15	120-1	蛇塚B(第一次)	新子田字野馬久保	#						S54年度発掘調査	
16	120-2	蛇塚B(第二次)	新子田字野馬久保	#						S58年度発掘調査	
17	122	野馬窪遺跡群	備久保字野馬窪	#	○	○	○	○			
18	122-1	野馬窪遺跡	備久保字野馬窪	#	○					S56年度発掘調査	
19	141	安原大塚古墳	安原字城前	#		○					
20	263	戸坂遺跡群	新子田字戸坂・戸取口・五ヶ久保・家 後・星谷端・道端・梅ヶ反田・供養塚	段丘	○	○	○	○	○		
21	275	鳥坂城跡	新子田字戸坂	#						○	
22	263-1	戸坂遺跡	新子田字戸坂	#		○			○	S46年度発掘調査	
No	区分No	遺跡名	No	区分No	遺跡名	No	区分No	遺跡名	No	区分No	遺跡名
23	10	栗毛取遺跡群	38	73	宮の西古墳	53	138	東大久保遺跡	68	250	馬瀬口遺跡群
24	44	上若子遺跡	39	46	櫻色遺跡	54	137	橋現平遺跡	69	257	中条峠城跡
25	52	岩村田遺跡群	40	48	横敷遺跡	55	265	池邊遺跡	70	258	中条峠古墳群
26	53	清石遺跡	41	49	上小平遺跡	56	551	池邊城跡	71	256	青山遺跡群
27	56	東大久保遺跡群	42	118	下供造石遺跡	57	276-1	氏神古墳群	72	262	青山古墳
28	65	下伴助B遺跡	43	117	上の城遺跡群	58	266	境内遺跡	73	268	石田遺跡
29	61	鶴ヶ窪遺跡	44	542	藤ヶ城跡	59	264	新子田神明の本遺跡	74	269	志賀神明の本遺跡
30	74	一本松古墳	45	124	岩井堂遺跡	60	545	浅井城跡	75	270	海老池遺跡
31	64	下伴助A遺跡	46	127	戸屋敷遺跡群	61	267	家之前遺跡	76	255	深瀬遺跡群
32	70	丸山古墳群	47	131	東村遺跡群	62	121	東内池遺跡	77	271	清水遺跡
33	70-1	丸山古墳1号墳	48	132	後東遺跡群	63	251	小池遺跡	78	272	穂伏遺跡
34	63	万助久保遺跡	49	139	燕城跡	64	252	和田上遺跡群	79	273	上海和田遺跡
35	62	木田橋遺跡	50	136	大角遺跡	65	261	和田上古墳	80	274	安坂遺跡
36	60	北山寺遺跡	51	134	若久保遺跡	66	253	和田遺跡			
37	59	宮前遺跡	52	140	入大久保古墳群	67	254	壺の宮遺跡			

査の増加に伴ってようやく実態が明らかになりつつある。弥生集落の一大密集地である湯川右岸、湯川流域の長土呂、岩村田地域では発見例が少ない弥生末～古墳初頭の遺跡が当地域で比較的多く発見される事象は注目に値する。(黒岩忠男)

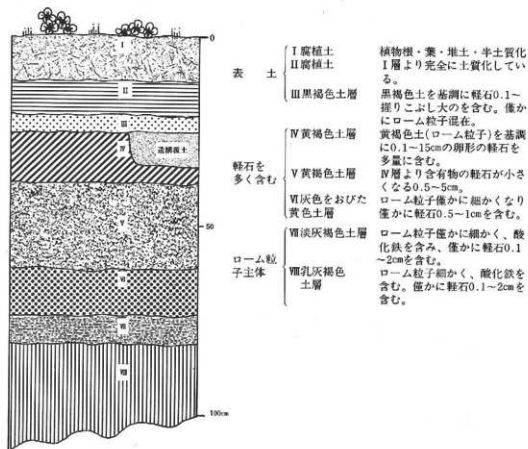
第Ⅲ章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

高師町遺跡

本遺跡は田切り地形の台地上に位置するため、耕作土（第Ⅰ・Ⅱ層）、黒褐色土（第Ⅲ層）などの有機質土の堆積は25cm内外をはかる程度で極めて薄い。その直下のローム層（第Ⅳ層）は遺構確認面となり、本調査で検出された遺構はすべてこの第Ⅳ層上において確認された。確認面以下の層序は軽石を多く含むローム層（第Ⅳ～Ⅵ層）、ローム粒子主体の第Ⅶ・Ⅷ層などの第1追分軽石流が1m以上厚く堆積している。

(小山)

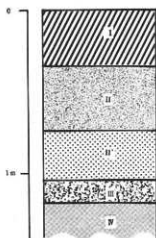


第4図 高師町遺跡基本層序模式図

西大久保遺跡

西大久保遺跡群は、湯川左岸の台地上に位置し、標高は 720m～735m内外を測る。今回はその東側、幅約10m、長さ約750mについて調査を行った。調査区内は概ね南に向っての緩傾斜地であるが、起伏が激しく高所と低所によって土層に相違が見られるため、基本土層の抽出は、D区中央付近とC区南側の2箇所で行った。第V～VIII層は第一追分軽石流で、少なくとも5回の噴出があったことを示し、また、各層の上面が水平でなく、層厚が不規則であることは、空中堆積であることを示している。

西大久保遺跡基本土層（C区南側）



第5図 西大久保遺跡C区南側
基本層序模式図

第I層 暗褐色土層（7.5YR 3/3）

耕作土、粘性弱く、粒子細かい。火山灰質

第II層 黒色土層（7.5YR 1.7/1）

粘性あり、しまりなし。粒子細かく、パミスを微量含む。

第II'層 黒色土層（7.5YR 1.7/1）

粒子細かく、第II層よりも堅く締まる。

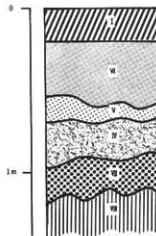
第III層 極暗褐色土層（7.5YR 2/3）

粘性・しまりあり。ローム粒子・パミスを含む。

第IV層 浅黄橙色土層（7.5YR 8/4）

粘性弱く、径2～3cmの赤色塊、灰白色粒子を含む。本遺跡の遺構確認面である。

西大久保遺跡基本土層（D区中央付近）



第6図 西大久保遺跡D区
中央付近基本層序模式図

第V層 灰白色土層（7.5YR 8/2）

粘性弱く、小型の赤色塊、灰白色粒子含む。

第VI層 灰白色土層（7.5YR 8/1）

粘性弱く、第IV層と同じ径2～3cmの赤色塊、浅橙色粒子を含む。

第VII層 浅黄橙色土層（10YR 8/4）

粘性弱く、灰白色粒子が多量に混入し、赤色塊を含む。

第VIII層 灰白色土層（7.5YR 8/1）

粘性弱く、赤色塊はほとんど含まれない。

第2節 検出遺構・遺物の概要

高師町遺跡

本遺跡からは遺構以外に風倒木址が3箇所で確認されている。これらは第1・2号特殊遺構などの平安時代の遺構を破壊しており、これらよりも後世に形成されたことがわかる。

検出遺構

竪穴状遺構	1基	平安時代?
特殊遺構	2基	平安時代
柱穴址	1基	時期不明
土坑	3基	時期不明
溝状遺構	2基	江戸時代?

出土遺物

土器

土師器（平安時代）……甕・坏・高台付坏

須恵器（平安時代）……甕・坏

弥生土器?（中期?）……壺?

陶磁器（近世・近代?）……播鉢・椀

石器

打製石斧

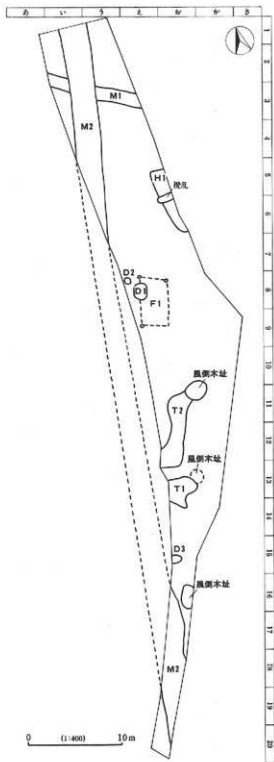
西大久保遺跡

検出遺構

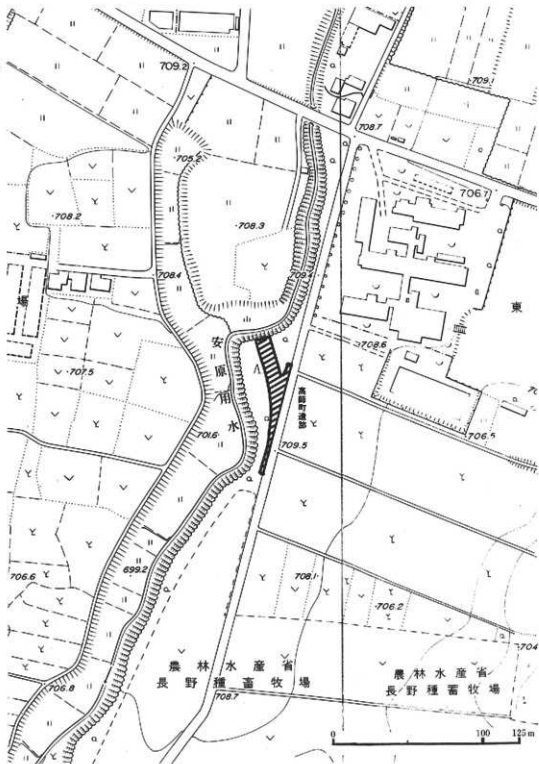
土坑	1基	時期不明
風倒木址	3基	

出土遺物

土器	土師器、陶器
石器	打製石斧



第7図 高師町遺跡遺構全体図



第8図 高師町遺跡発掘区設定図 (1:2500 佐久市基本図15・16による)



第9図 西大久保道路の地形及び発掘区設定図 (1:2,500 佐久市基本図 9-10-15-16による)

第IV章 高師町遺跡の遺構と遺物

第1節 竪穴状遺構

1) 第1号竪穴状遺構

遺構 (第10図、図版六の1)

本遺構は調査区の北側西端、え・おー5・6グリッドから検出された。プランの大半が東側の未調査区外にあり、中央部は攪乱されている。

プランは大半が未調査区にあるため、明らかにできないが、東壁長は422cmをはかり、長方形か、方形の遺構になるものと考えられる。

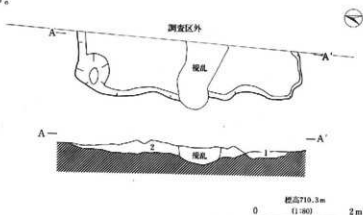
覆土は2層からなる。第1層が南側に小範囲で偏在し、第2層が北側に大きな範囲で堆積する。第1層はローム粒子、軽石が混ざる黒褐色土、第2層はローム粒子が多量にまざる暗茶褐色土である。

確認面からの壁高は5~10cmをはかり、床面からの立ち上がりはゆるい。壁体は地山のローム層を利用して構築されているが、やや軟弱である。

床面は地山のローム層を利用して構築されているが、極めて軟弱であり、起伏に富む。踏みかためられた痕跡はほとんどみられない。付属施設は北西コーナーに掘り込まれた土坑状の落ち込みがあるが用途は不明である。

遺物はいずれも細片で図化できなかったが、器肉の薄い甕の口、胴部片、内面黒色研磨の坏の破片、須恵器甕の破片が極少量出土している。これらが遺構に共伴するか否かは判然としない。

(小山)



層序

1. 黒褐色土層 黒褐色土を基調にローム粒子が混在する粒子は細かい、軽石φ1~2cmを含む、やや粘性强り。
2. 暗茶褐色土層 ローム粒子が多量に混在する。軽石φ2~5cmを含む、1層に比べ粘色やや弱い。

第10図 第1号竪穴状遺構実測図

第2節 特殊遺構

1) 第1号特殊遺構

遺構(第11図、図版二の2)

本遺構は調査区の中央南寄りの西端、お-13・14グリッド内に位置している。プランの西側は調査区外にあるため、全容は明らかでないが、台地の縁辺まで伸びる遺構である可能性が高い。

プランは南北長6m内外の不整形な形状を呈する。これは最下層の第6・7層の砂の堆積層の存在からも明らかのように、本遺構が当初は水の浸蝕などによる自然営力によって形成された落ちこみであるからに他ならない。従って、断面形も側面の各所がオーバーハングしており、その中に砂が充たされている。掘り上がりの平面図、土層断面をみると、この自然営力によって形成された落ち込みが人的な行為によって、数次にわたり、埋めもどし(第4層の存在)→掘り込み(第3・5層の下端ライン)→埋めもどし(第3・5層の存在)が繰り返されたことが理解できる。落ち込み内に四箇所認められる土坑状のプランもこの行為の結果、形成されたものであろう。

遺物の出土状況

これらの人的な行為によって掘り込まれたと考えられる土坑プラン内の第5層中からは、ほぼ完形の供膳具(土師器杯・高台付杯12-1~5)がまとまって出土している。これらの土器群はいずれもほぼ正位に掘え置かれたような状態で出土しており、供献されたものと理解するのが適当であろう。

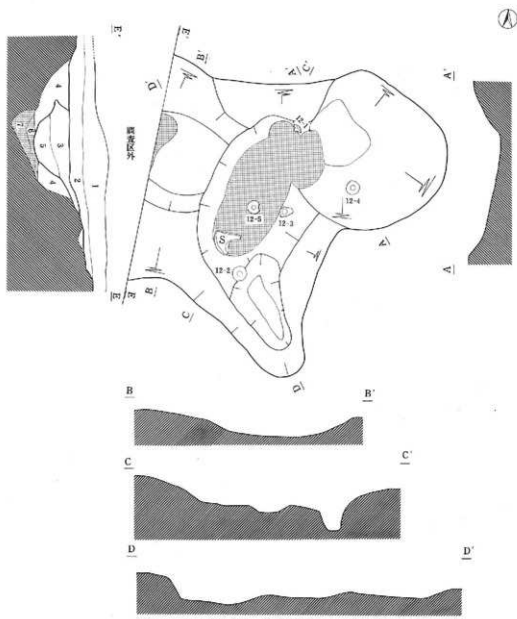
遺物(第12図、図版三の3~7)

本遺構から出土した土師器の器種には杯・高台付杯がある。

杯12-1~4、高台付杯12-5はいずれも内面が黒色研磨される点で共通する。杯12-1~3は、口辺部が内湾気味に開く形態をもち、法量は口径13.7~14cm、器高4.1~4.3cm、底径6.4~6.8cmでほぼ一致する。底部成形はいずれも回転糸切りによると考えられるが、12-3を除き12-1・2は全面に丁寧な手持ちヘラケズリが施されており、判然としなない。12-4は口辺部は内湾気味に開き、端部でわずかに外反する。12-1~3にくらべると底径が1cm以上小さい。底部は回転糸切りが施されている。

高台付杯12-5は貼付による断面矩形の高台を有するが、高台部を除いた形態、法量は、杯12-1~3とおおむね一致する。底部は回転ヘラケズリが施されている。

墨書は12-1・4・5にみられる。12-1には「井」、12-4には「七」と読み取れる墨書が施され、12-5は判読不明である。

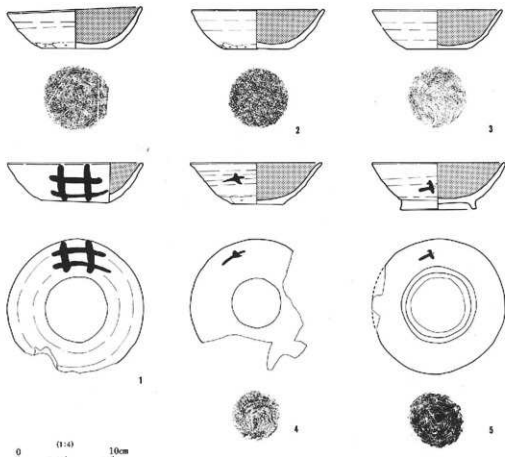


解序

- | | |
|-----------|--|
| 1. 淡茶褐色土層 | 表土 |
| 2. 暗茶褐色土層 | 小石、軽石φ0.3-0.5cm ² 程度混在する。中粒柱状者あり。 |
| 3. 暗茶褐色土層 | 黒褐色土を基調にローム粒子。僅かに小石・軽石φ0.1-0.5cm ² 混在する。 |
| 4. 赤褐色土層 | 前面によるものかより多量のローム粒子。軽石φ1-5cm ² 混在する。 |
| 5. 淡茶褐色土層 | 黒褐色土・ローム粒子。砂粒、小石、軽石φ0.3-1cm ² 混在する。粒子は粗い。 |
| 6. 灰茶褐色土層 | 砂粒が多く混在する。(この層より灰濁土) |
| 7. 暗茶褐色土層 | 砂粒、黒褐色土、軽石 ² 混在する。 |

標高710.3m
(1:400) 1m

第11図 第1号特殊遺構実測図



第12図 第1号特殊遺構出土土器実測図

第2表 第1号特殊遺構出土土器観察表

検出 番号	器種	法量	成形・形態の特徴	調 整	備 考
12-1	土師器 環	14.0 4.3 6.8	口辺部は内湾気味に開く。	内) 黒色研磨 外) ロクロコ ナデ、口辺部下位・底部手持 ヘラケズリ	墨書「井」 完全実測 No 4
12-2	土師器 環	14.0 4.1 6.4	口辺部は内湾気味に開く。	内) 黒色研磨 外) ロクロコ ナデ、口辺部下位・底部手持 ヘラケズリ	外面煤付着、手ズレ 完全実測 No 1
12-3	土師器 環	13.7 4.1 6.5	口辺部は内湾気味に開く。 底部回転糸切り	内) 黒色研磨 外) ロクロココナデ	回転実測A No 3 5層内
12-4	土師器 環	13.8 4.4 6.3	口辺部は内湾気味に開き、上端でワイ かに外反する。底部回転糸切り	内) 黒色研磨 外) ロクロコ ナデ、下位手持ヘラケズリ	回転実測A No 5 5層 T 2 IV区と接合
12-5	土師器 高台付 環	14.3 5.0 8.0	口辺部は内湾気味に開く。 貼付高台を有する。	内) 黒色研磨 外) ロクロコ ナデ、底部回転ヘラケズリ	墨書 判読不明 完全実測 No 2

以上、自然営力によって形成された落ち込み内に掘り込まれた土坑内に土師器環・高台付環などの供膳具が供献されていること、その中に墨書が多く含まれていることなどを勘案すると、本遺構の性格は祭祀的な性格を有すると理解される。また、時代性については出土土器から平安時代前葉と考えておきたい。

(小山)

2) 第2号特殊遺構

遺構(第14区、図版四の1)

本遺構は調査区の中央西側、お-11・12・13グリッド内に位置している。南北に溝状に伸びる落ち込みであるが南端で屈曲し、西側の調査区外まで伸びているため、全容は明らかでない。また、北側一部は風倒木址によって破壊されている。

検出長は約8.2m、深さは最深部で80cmをはかるが、この落ち込みはT1と同様に自然営力によって形成された可能性が強い。底面側面は極めて凹凸に富み、各所がえぐられたかの如くオーバーハングしており、その中には砂粒主体の第4層が充たされている。土層断面をみると、この落ち込み内の数箇所に埋めもどし→掘り込み→埋めもどしの行為が行われ、土坑状の掘り込みが形成されたことが明らかである。従って、本遺構の堆積土は第4層を除いて、人為的に埋めもどされたものであることが理解される。

遺物の出土状況

本遺構の人為的に埋めもどされたと考えられる堆積土内からは、T1と同様に完形、それに近い供具(土師器環、高台付坏、須恵器坏13-1~7)の他、土師器甕13-8・9などの煮沸具も共存している。出土状態はT1ほどのまとまりがみられず、また、破損品も多いが、大方は正位の状態でおかれており、供献された可能性が強い。また、12-4はT1の5層の破片と接合関係を有する。

遺物(第13区、図版五)

本遺構出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器があり、土師器の器種には坏・高台付坏・甕、須恵器の器種には坏、黒色土器の器種には坏か碗がある。

土師器坏・高台付坏はいずれも内面に黒色研磨が施されている。坏13-4・5の底部はヘラケズリされ、13-4は口辺部が内弯気味に開き、端部で外反する。13-5は底部片であるが、かなり大形の形態になると考えられる。高台付坏13-6は貼付による高台を有するが破損している。口辺部は内容気味に開き、上端でわずかに外反している。口径15.7cmをはかる大型品である。

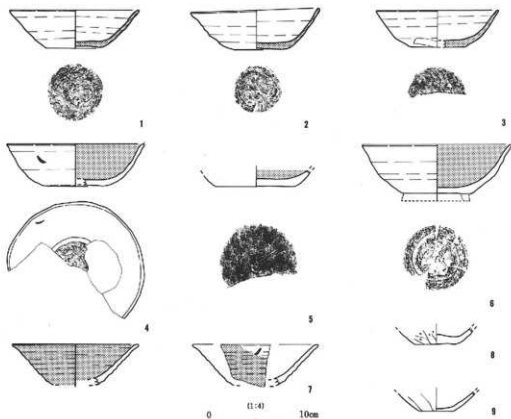
土師器甕13-8・9はいずれも不安定な底部をもつ薄臺の底部片である。

須恵器坏13-1~3の底部は1が回転糸切りで未調整、2が回転糸切りののち回転ヘラケズリ3が回転糸切りののち一部を手持ちヘラケズリとバラエティーに富む。形態は1が内弯気味に開いたのち、端部でわずかに外反し、2・3はほぼ内弯気味に開く。

黒色土器は坏か、高台が付いて碗状になるものか判断し難い。内外面に黒色処理が施され、胎土は極めて硬質である。形態は口辺部が直線的に大きく開いて端部でやや外反する。

墨書はいずれも判読不明であるが13-5・7に施されている。

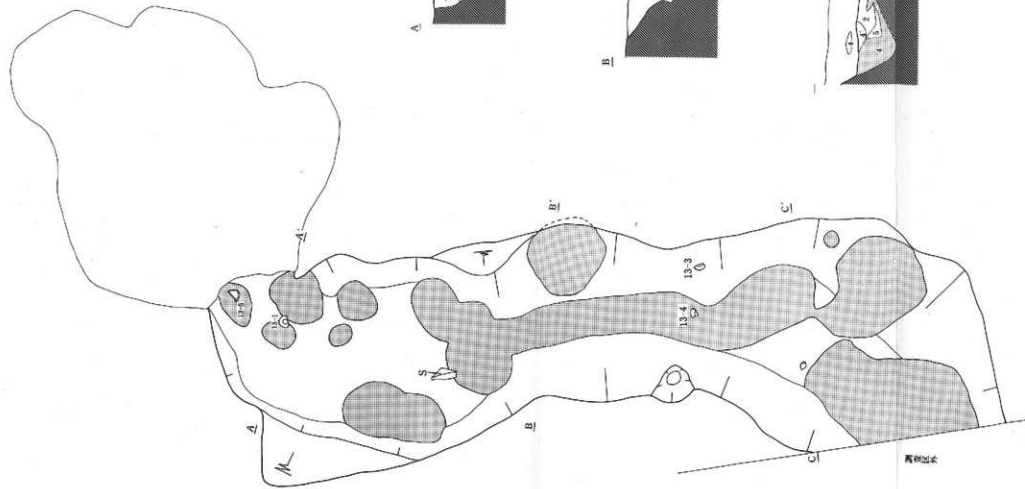
以上、本址の性格、時代性は13-4の接合関係からT1とほぼ同様と考えられる。(小山)



第13図 第2号特殊遺構出土土器実測図

第3表 第2号特殊遺構出土土器観察表

種別 番号	器種	法量	成形・形態の特徴	調整	備考
13-1	須恵器 環	13.6 4.0 5.9	口辺部は内寄気味に開き、端部で外反する。底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ	回転実測A No 3
13-2	須恵器 環	13.5 4.2 5.0	口辺部は内寄気味に開く。底部回転糸切りのち、回転ヘラケズリ。	内外面 ロクロヨコナデ	回転実測A No 4
13-3	須恵器 環	(13.0) 3.9 (5.6)	口辺部は内寄気味に開く。底部回転糸切りのち、一部手持ちヘラケズリ。	内外面 ロクロヨコナデ 外) 口辺部下位の一部にヘラケズリ	回転実測B No 1
13-4	土師器 環	14.5 4.5 (6.2)	口辺部は内寄気味に開き、端部で外反する。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ	回転実測B 墨書? No 6 T 1の5層と接合
13-5	土師器 環	— (1.7) 8.2	大形品?	内) 黒色研磨 外) 磨滅のため、不明	回転実測A No 2
13-6	土師器 高台付 環	(15.7) 5.1 7.2	口辺部は内寄気味に開き、端部でわずかに外反する。底部ナデ、高台は貼付。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ	回転実測B I区
13-7	黒色 土師器 環か向	(13.2) 4.30 —	口辺部は直線的に大きく開き、端部でやや外反する。	内外面 ロクロヨコナデ、黒色 埋	墨書字不明、胎土極めて硬質、回転実測B No 8
13-8	土師器 甕	— (1.7) 4.2		内) 丁家なナデ外) 斜、縦位処ラケズリ、底部ヘラケズリ	回転実測B IV区
13-9	土師器 甕	— (2.2) (3.7)	底部小さく不安定。器肉薄い。	内) 丁家なナデ 外) ヘラケズリ	回転実測B III区



第14图 第2号特殊遺構実測图

附注
 1. 原色土層
 2. 原色土層
 3. 原色土層
 4. 原色土層
 5. 原色土層
 6. 原色土層
 7. 原色土層

1. 原色土層
 2. 原色土層
 3. 原色土層
 4. 原色土層
 5. 原色土層
 6. 原色土層
 7. 原色土層

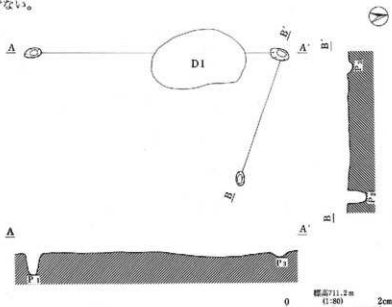
1. 原色土層
 2. 原色土層
 3. 原色土層
 4. 原色土層
 5. 原色土層
 6. 原色土層
 7. 原色土層

第3節 柱穴址

1) 第1号柱穴址

遺構 (第15図)

本遺構は調査区の中央北寄り、え・お-8・9グリッド内に位置している。四本の柱穴を有する掘立柱建物址と考えられるが、南東側の柱穴は破壊されている。東西間 2.8m、南北間 5.2mをはかり、長軸方位は $N-11^{\circ}-E$ をさす。各柱穴は長軸が30~40cm、短軸が20~30cmの細長い楕円形を呈し、柱穴セクションにおいては柱痕を認められるもの(P2)もある。遺物は検出されず時代性は明確でない。



第15図 柱穴址実測図

第4節 土坑

1) 第1号土坑

遺構 (第16図、図版六の2)

本遺構は調査区の中央北寄りのえ-8グリッド内に位置している。南北 185cm、東西 130cmの楕円形を呈し、長軸方位は $N-8^{\circ}-E$ をさす。確認面からの深さは最深部でも 5cmと浅く、断面

形は底面が平坦でおおむね逆台形状を呈する。

覆土は2層からなり、ロームブロックが多量に混入する人為的な堆積状態を示している。

遺物は覆土最上層から1片のみ検出された。18-1はLR縄文が施される壺の胴部片と考えられ、弥生時代中期後半のものと思われる。遺構との共存性は明確でないため、本遺構の所産期も判然としない。

2) 第2号土坑

遺構 (第16図、図版六の3)

本遺構は台地中央北寄りのえー8グリッド内に位置している。

南北78cm、東西69cmのやや不整な楕円形を呈し、長軸方位はN-10°-Wをさす。

確認面からの掘り込みは最深部で33cmをはかり、断面形は逆台形状を呈する。

覆土は黒褐色土1層のみからなる。

遺物は検出されず、本遺構の所産期も判然としない。

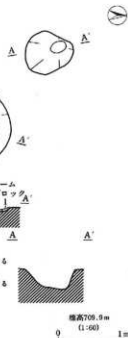
3) 第3号土坑

遺構 (第17図、図版六の4)

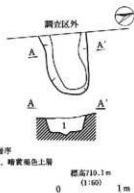
本遺構は調査区南寄りの西端、おー15グリッド内から検出された。西側プランが調査区外にあるため、全容は明らかでないが、長楕円形を呈する土坑と考えられる。深さは最深部で32cmをはかり、断面形は逆台形状を呈する。

覆土は、ローム粒子と黒褐色土がまざった土で軽石を多量に含んでいる。

遺物は検出されず、本遺構の所産期も判然としない。



第16図 第2号土坑実測図



第17図 第3号土坑実測図



第18図
第1号土坑
出土土器
拓影図

(小山)

第5節 溝状遺構

1) 第1号溝状遺構

遺構 (第19図、図版六の5)

本遺構は調査区の北側、台地の北端部、い・う・え-3グリッド内に位置している。

中央部を南北に縦定する第2号溝状遺構に破壊され、分断されているが、西は台地縁辺まで、東は台地中央まで長く直線的に伸びる溝と考えられる。

検出長は約 9.8m、溝幅 135cm～150cmをはかり、確認面からの深さは42～50cmをはかる。断面形は、底面がやや丸味をもつもの、おおむね逆台形状を呈する。

覆土は、黒褐色土を基調とする第1・2層、茶褐色土を基調とする第3・5層、ローム層を基調とする第4層からなり、プライマリーな堆積状態を示している。

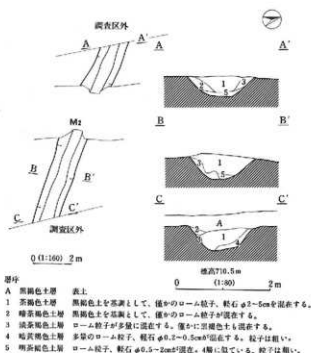
遺物は全く検出されず、本遺構の所産期についても明確でないが、第1号溝状遺構よりも古い時代に造られたものであることは間違いない。

2) 第2号溝状遺構

遺構 (第21図、図版六の5)

本遺構は調査区の北側、及び南側で確認された。未調査区の中央部で、溝が連続していることはほぼ明らかであり、これらをすべて含めた検出長は73mをはかる。

溝幅は 250～315cmをはかりほぼ直線的である。深さ



第19図 第1号溝状遺構



第20図 第2号溝状遺構出土石器実測図

は、98～109cmをはかり、断面形はおおむねV字形を呈し、底面は幅狭ではあるが、平坦である。

覆土は8層に分けられたがほとんどの層序にローム粒子・ブロックが混在しており、人為的に埋めもどされた堆積状況を示していると思われる。

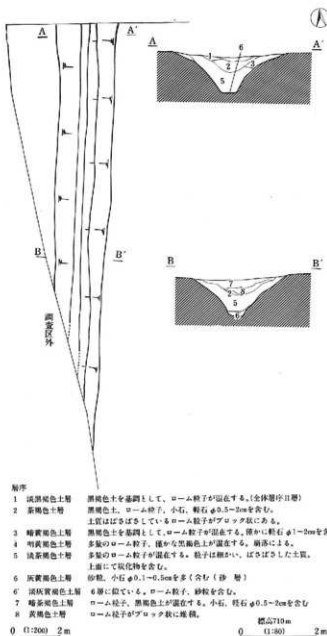
地元の人々の話によると、木溝は、近世、近代において灌漑用水として利用されたものであると言うことで、種畜牧場付近まで長く伸びる溝であるらしい。

遺物（第20図、図版六の6）

本遺構内からは土師器・須恵器・陶器・石器が出土している。土師器・須恵器は壺・坏の細片で混入遺物である。

陶器は常滑系擂鉢と白磁染付椀が出土しているが、染付は印盤が用いられたもので19世紀以降の所産である。石器は玄武岩製の短冊型の打製石斧20-1がある。

(小山)



第21図 第2号溝状遺構実測図

第6節 グリッド・表採遺物

本調査でプラン確認時に検出された遺物には須恵器・土師器が計3点あるが、いずれも細片で図化はできなかった。

(小山)

第V章 西大久保遺跡の遺構と遺物

第1節 土坑

1) 第1号土坑

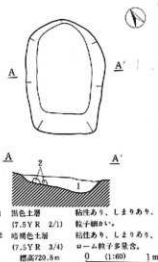
遺構・遺物 (第22図、図版七の5)

本遺構は調査区南側D区北端部より、全体層序第IV層浅黄橙色土層上面において単独で検出された。

平面形態及び規模は、182×126cmの楕円形を呈し深さは31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、東に傾斜し軟弱な状態である。壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がり、特に南側において顕著である。

覆土は2層に分割された。1層は黒色土層(7.5YR 2/1)で、粘性・しまりを有し、粒子細かい。2層は粘性・しまりを有し、ローム粒子を多量に含む暗褐色土層(7.5YR 3/4)でブロック状にわずかに観察されたのみである。

本土坑からは全く遺物が出土していないため、性格及び所産期は判然としない。(三石)

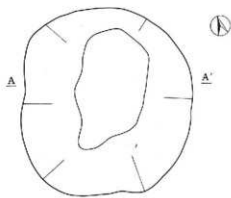


第22図 第1号土坑実測図

第2節 風倒木址

遺構 (第23～25図、図版七の6～8)

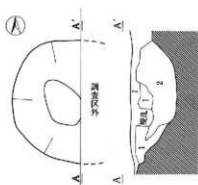
本遺跡からは3基の風倒木址が検出された。第1・2号風倒木址はD区北端部、第3号風倒木址はC区中央付近南側に位置し、いずれも全体層序第IV層浅黄橙色土層上面において単独で検出された。第1号風倒木址は405×356cmの南北にやや長い楕円形を呈し、深さは120cmを測る。第2号風倒木址は東半部が調査区外のため、西半部が検出されたのみである。径約260cmのほぼ円形を呈すると考えられ、深さは104cmを測る。第3号風倒木址は攪乱により一部上面を破壊されているが370×320cmのほぼ円形を呈し、深さは112cmを測る。(三石)



- 1 黒褐色土層 (7.5Y R 3/7) 粘性なし、しまりあり、ローム粒子含、パキス多量に含、粒子細かい。
- 2 褐色土層 (7.5Y R 7/0) 粘性なし、しまりあり、ローム主体、パキス含。
- 3 暗褐色土層 (7.5Y R 3/7) 粘性なし、しまりあり、ローム粒子、パキス含。

標高720.8m
0 2m (1:80)

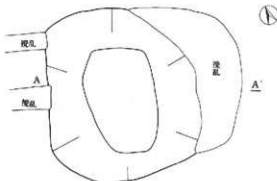
第23図 第1号風倒木址実測図



- 1 暗褐色土層 (7.5Y R 3/7) (制作土) 粘性なし、しまりなし。
- 2 暗褐色土層 (7.5Y R 3/0) 粘性なし、しまりなし、ローム粒子含、パキス少量含。
- 3 褐色土層 (7.5Y R 4/4) 粘性なし、しまりあり、ローム主体、茶褐色土がブロック状に混、パキス多量含。

標高721.2m
0 2m (1:80)

第24図 第2号風倒木址実測図

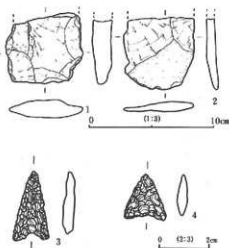


- 1 灰褐色土層 (7.5Y R 3/7) 粘性なし、ローム粒子多量含、パキス含。
- 2 褐色土層 (7.5Y R 2/1) 粘性あり、ローム粒子、パキス含、粒子細かい。
- 3 明褐色土層 (7.5Y R 5/0) 粘性なし、ローム主体、パキス多量含。
- 4 褐色土層 (7.5Y R 4/0) 粘性なし、ローム主体、パキス多量含。
- 5 褐色土層 (7.5Y R 1.7/1) 粘性あり、パキス少量含、ローム粒子、塊状に含む、粒子細かい。
- 6 ローム中に5層がブロック状に点在する

標高724.4m
0 2m (1:80)

第25図 第3号風倒木址実測図

第3節 表採遺物 (第26図)



第26図 西大久保遺跡表採石器実測図

本遺跡の表採遺物は、打製石斧1点、土師質土器、中・近世の陶器の小片のみであるが、昭和57年度に佐久市教育委員会によって行われた「佐久市遺跡詳細分布調査」の際に、打製石鏃・打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器等が表採されている。これらの遺物のうち石器4点が図化できた。

26-1は今回の調査で表採された玄武岩製の打製石斧で、基部は欠損しているが残存部で幅5.8cm、重さ68.6gをはかる。26-2～4は、「佐久市遺跡詳細分布調査」の際に表採されたものである。26-2は玄武岩製の打製石斧で、刃部のみ欠損品であり、刃部には使用痕が観察され、残存部で幅5.5cm、重さ36.9gをはかる。26-3・4は打製石鏃で、26-3はチャート製の凹基鏃で長さ2.8cm、幅1.4cm、重さは1.3gをはかる。26-4は黒曜石製の小型の凹基鏃であり、長さ1.8cm、幅1.6cm、重さは0.8gをはかる。

この他土器・陶器類は小片のため図示し得なかったが、胴部に櫛描波状文の施される甕、15～16世紀と考えられる土師質土器小皿、土師質土器の火鉢と思われる小片、中・近世の陶器片などがあり、中世と考えられる土師質土器・陶器等が多量に表採されている。(三石)

第VI章 調査のまとめ

第1節 高師町遺跡

高師町遺跡より検出された遺構は竪穴状遺構1基、特殊遺構2基、柱穴址1基、土坑3基、溝状遺構2基などがある。一方、遺物は土師器、須恵器、石器がある。以下にまとめを記したい。

1) 遺構

高師町遺跡において時期が明示できる遺構は平安時代に比定される第1号竪穴状遺構、第1・2号特殊遺構のみである。他は時期の限定は不明確であり、第1号溝状遺構が概ね近世～近代の用水と捉えられるのみである。ここでは平安時代の遺構を中心に考察を行うことにする。

第1号竪穴状遺構は当初居住施設と考えていたが、生活面＝床面が大きな起伏をもち、軟弱であることから竪穴状遺構という曖昧な表現を用い、性格の限定を避けた。未調査区部分の調査が必要であろう。時代性については、第1・2号特殊遺構とほぼ同時期と考えておきたい。

第1・2号特殊遺構については、ほぼ同時期に形成されたものと解しておきたい。遺構形成の要因が自然営力による可能性が強いこと、T2出土の13-4がT1第5層中出土の破片と接合関係をもつこと、遺物の出土状態、内容（墨書土器の存在）がほぼ一致することなど両遺構の共通要素は多い。未調査区の台地縁辺部で両遺構が連結していることも考えられよう。遺構の性格については祭祀的要素が強く認められる。例えば先述したように台地の縁辺から自然営力によって内側へ削り込まれて形成されたと考えられる溝を利用し、数次にわたって埋めもどし→掘り込み→埋めもどしの作業が繰り返されていること、掘り込み内に墨書土器を含む多くの供具（土師器坏・高台付坏、須恵器坏、黒色土器）が供献されていることなどである。墓坑とも考えられるが骨片・骨粉等は全く認められず、想像を豊かにすれば、自然営力（水流）によって形成された落ち込みに、水と深く関わる「井」の文字の記された墨書土器が供献されていることからみて、雨など気候条件に対する当時の人々の信仰心の表われと解する方が適当であろう。いずれにしても同様な遺構の発見例は皆無に等しく、墨書土器もこのような遺構からの検出例をみない。今後、同様な遺構の発見、本遺跡周辺の調査の増加を待って、史的背景も考慮しながら、本遺構の性格を再検討する必要がある。尚、史的背景とは例えば『日本紀略』^{上1}「額察三代格」「扶桑略記」など^{上1}の記載にみられる仁和三・四年（887、888年）の信濃國六部の水害などもこれに該当する。

仁和の水害については「信濃國六郡」が何処の地域を示したものは未だに不明確であるが、当時の長野県全圏に相当な降雨があったことは想像に難くない。本調査で検出された自然営力（水流）によって形成された特殊遺構の年代は出土物から9世紀代に比定され、前述の仁和の水害の年代と時代性が一致することも考えられる。また、遺構の性格で水に関わる祭祀的性格が想定されることも、仁和の水害との深い関わりを想起させるのである。今後十分な検討を要するべき課題と言える。

2) 遺物

本調査で検出された遺構内から、まとまった遺物が検出されたのは第1・2号特殊遺構のみである。器種には土師器壺、坏、高台付坏、須恵器坏があるが、壺はいずれも細片で全形態を知り得るものはなく、出土量も少ない。従って、器種は土師器・須恵器ともに坏、高台付坏などの供膳具=食器類が主体である。出土状態からみて、これらが日常生活に用いられたものでないことは自明であるが、これらの中に墨書土器が多く含まれていることは興味深い。墨書土器の分析は後述することにして、まず、これらの土器群に年代的な位置を与えておきたい。

佐久地方における奈良・平安時代の土器編年研究は、近年各遺跡毎に割合小さな時間幅で分類作業が試みられているものの、地域的な様式概念に則った大系的な編年案は呈示されていない。但し、奈良時代を中心とする8世紀代の土器については、花岡弘氏が1983年の曾根城報告^{註2}、筆者が、1984年の若宮報告^{註4}、1985年の野火付報告^{註5}で器種の分類、各器種の変移の推定を行ったのち、本年3月刊行予定の前田報告^{註3}では堤 隆氏によって8世紀の土器を四期区分した編年案が呈示されるようになっており、今後研究が活発化することが予想される。反面、平安時代の9世紀以降の土器については、具体的な編年案がほとんど組まれておらず、こうした状況下で土器組成に欠落器種の多い本資料では、その位置づけは自ら限界性が多い。ここでは、従来の概略的な平安時代土器の変遷観に則って位置づけを行っておく以外にあるまい。

県内の平安時代の供膳具（特に坏・高台付坏）の従来の変遷観は土師器（内面黒色研磨されるものが多い）と須恵器が伴出する時期→土師器と須恵器に東濃地方からの灰釉陶器^{註6}が加わる時期→須恵器生産が衰退し、土師器と灰釉陶器が主流となる時期、に大別されてきた。佐久地方でもこの傾向を看取することができ、灰釉陶器が爆発的に流入し始める10世紀前半以降、供膳具としての須恵器は激減する。また、土師器における内面黒色研磨も衰退化の傾向がみられるようになる。これらの傾向から考えると、高師町遺跡第1・2号特殊遺構出土の一括資料は灰釉の伴出がないこと、土師器坏、高台付坏のすべてに内面黒色研磨が施されること、須恵器坏が伴出していることなどを勘案して9世紀代に位置づけておきたい。また、今後、詳細な分析・分類を行う上での検討課題として、須恵器坏I3-1～3の底部成形のバラエティーを掲げておく。

墨書土器について

第1・2号特殊遺構内から出土し、陶化された供膳具（土師器杯・高台付杯・須恵器杯）12個体のうち、5個体の土器に墨書が認められた。このうち、判読可能なものは土師器杯12-7の「井」、12-4の「七」のみで他は判読不可能である。器種別には内面黒色研磨の杯が4点、黒色土器1点で須恵器にはみられない。佐久地方における墨書土器は1973年岡田正彦氏⁴¹³によって戸坂遺跡の7例、東一本柳古墳の2例が紹介されたのち、1980年花岡弘氏が関口B報告で集成が行われている。この時点で表採資料を含め、9遺跡18例の墨書土器が紹介されているが、その後7年近く経過した現在、緊急調査の増大に伴い墨書土器の検出例は発掘調査で報告がなされているものに限っても15遺跡47例と増加している。これらをまとめたのが第27図および第4表である。

先述した概略的な編年観を用いてこれらを時期別に概観すると8世紀代1例、9世紀代（10世

須恵器		土師器 内面黒色研磨 9C 10C初			
8C 後	9C 10C初				

第27図 佐久平の墨書土器

第4表 佐久地方の黒書土器出土遺跡・遺構一覧表

番号	種別	器種	施文箇所	黒書文字	遺跡・遺構名	所在地	年代
1	須恵器	坏	底 部	「平」	筒師屋H1住	佐久市小田井	8C後
2	須恵器	坏	口 辺 部	「月」	上桜井北H6住	佐久市桜井	9C
3	須恵器	坏	口 辺 部	「左」	曾根城第5住	小諸市御影	9C
4	須恵器	蓋	天 井 部	「大工」	野火付H13住	御代田町御代田	9C
5	須恵器	坏	口 辺 部	「ミミミ」	雨堤 H1住	小海町小海	9C後10C
6	土師器	坏?	口 辺 部	「庚」	〃	〃	〃
7	土師器	坏	?	「雷」	〃	〃	〃
8	土師器	坏	口 辺 部	?	〃	〃	〃
9	土師器	坏	口 辺 部	?	〃	〃	〃
10	土師器	坏	?	?	〃	〃	〃
11	土師器	坏(内黒)	口辺部2箇所	「大」2文字	若宮 H6住	佐久市長土呂	9C
12	土師器	坏	口 辺 部	「長」	若宮 H6住	〃	〃
13	土師器	坏	口 辺 部	「七」	芝間 第3住	佐久市岩村田	〃
14	土師器	坏	口 辺 部	「上品」	芝間 第4住	〃	〃
15	土師器	坏	口 辺 部	?	宮ノ反第1住	小諸市御影新田	〃
16	土師器	坏	口 辺 部	「大田」	野火付H14住	御代田町御代田	〃
17	土師器	坏	口 辺 部	「八科」	野火付H10住	〃	〃
18	土師器	坏	口 辺 部	「正」	五ヶ城第9住	小諸市市	〃
19	土師器	坏	口 辺 部	「下」	戸坂 K1住	佐久市新子田	〃
20	土師器	坏	口 辺 部	「讓」	〃	〃	〃
21	土師器	高台付皿	口辺・底部	「才」	〃	〃	〃
22	土師器	坏	口 辺 部	「卒」	〃	〃	〃
23	土師器	高台付坏	口 辺 部	「卒」	〃	〃	〃
24	土師器	坏	口 辺 部	「下」	〃	〃	〃
25	土師器	坏	口 辺 部	「甲」	〃	〃	〃
26	土師器	坏	口 辺 部	「元」	関口B第6住	小諸市甲	〃
27	土師器	坏	口 辺 部	「長」	周防畑AII3住	佐久市長土呂	〃
28	土師器	坏	口 辺 部	「史」	周防畑AH2住	〃	〃
29	土師器	坏	口 辺 部	「中」	周防畑AH2住	〃	〃
30	土師器	坏	口 辺 部	「中」	周防畑AH2住	〃	〃
31	土師器	坏	口 辺 部	「青」	上桜井北H1住	佐久市桜井	9C?
32	土師器	坏	口 辺 部	?	上桜井北H6住	〃	9C?
33	土師器	坏	口 辺 部	「尾」	周防畑AH3住	佐久市長土呂	9C
34	黒色土器	碗か坏	口 辺 部	?	高師町 T2	佐久市新子田	9C
35	土師器	坏(内黒)	口 辺 部	?	高師町 T1	〃	〃
36	土師器	高台付坏	口 辺 部	?	高師町 T1	〃	〃
37	土師器	坏	口 辺 部	「井」	高師町 T1	〃	〃
38	土師器	坏	口 辺 部	「七」	高師町 T1	〃	〃
39	土師器	坏	口 辺 部	?	五ヶ城第2壁穴	小諸市市	10C
40	土師器	坏(内黒)	口 辺 部	?	五ヶ城第11住	〃	〃
41	土師器	坏	口 辺 部	「王」	曾根城第3住	小諸市御影	10C
42	土師器	坏	口 辺 部	?	五ヶ城第3住	小諸市市	10C
43	土師器	高台付坏	口 辺 部	「魚」	五ヶ城第3住	〃	〃
44	土師器	坏?	口 辺 部	?	五ヶ城第3住	〃	〃
45	土師器	坏	口 辺 部	「右」	竹之城第4住	望月町春日	〃
46	土師器	高台付坏	口 辺 部	「久」	東一本柳古墳	佐久市岩村田	11C?
47	土師器	坏	口 辺 部	「久」	〃	〃	11C?

紀代に入るものも含まれている可能性あり) 37例、10世紀以降9例となり、内面黒色研磨の土師器が盛行する9世紀代に最も多くの出土例がみられる。これに対し、8世紀代では僅か1例しか報告がなされていないが、御代田町前田遺跡の昭和60年度調査地区からは8世紀第1四半期の須恵器⁴¹³に墨書が認められているという。いずれにしても8世紀代における墨書土器は当地方においては僅少なものであった可能性が強く、一般集落への流布は9世紀代に入ってからと言えそうである。また、10世紀以降になると墨書土器は衰退する傾向がみられる。他県ではこのような墨書土器の推移を律令政治機構の確立から崩壊過程へと関連づけて考える研究が近年行われているが、当地方でも、土器編年を早急に確立し、史的背景と結びつける研究を行う必要がある。

種別では須恵器5点、土師器41点、黒色土器1点で圧倒的に土師器が多い。器種別では野火付遺跡H13号住居址出土の須恵器蓋以外はすべて坏・高台付坏・碗・皿等の供膳具である。8世紀代の墨書土器は先述した2例のみであるが、いずれも須恵器であり、当時の土器組成で供膳具は須恵器が主体を占めていたことを考えれば当然のことかもしれない。²²¹⁵9世紀代では須恵器4例土師器32例で土師器が多くなり、このうち、27例が内面黒色研磨のものである。他の5例は⁴¹⁵いずれも小海町雨堤遺跡から出土したもので(6~10)であり、甲斐型の坏に施されたもので、特異な存在である。10世紀以降はいずれも土師器である。内面黒色研磨が6例、そうでないものが3例である。墨書が施される部位は鋳師屋遺跡例27-1底部、戸板遺跡例27-21の口辺・底部以外はすべて口辺部(体部として記述されている場合が多いが、ここでは坏類の部位の名称は口辺部と底部に2大別して記述している。)に施されている。

遺構別にみると、本遺跡例のような祭祀的性格が強い遺構や、東一本柳古墳棺床から出土する例は少なく特異であり、他はいずれも住居址内からの出土である。他地域では寺院関係の遺跡からの検出例もみられるが、当地域では寺院関係と推定できる遺跡が調査されていないため、この点についてはわからない。また、比較的古道沿いの集落址から出土することが多いとされているが、これについてももう少し資料の増加、筆者の見識が深まるのを待って再考したい。但し、岡田氏も「…県下においても10軒以上の住居址が検出された遺跡からは例外があるとはいえ、少なくとも一点以上の墨書・刻書土器を発見しているのである。…」⁴¹⁷と指摘しているように9世紀代の当地方の集落址においては、ごく当り前に発見されるものである可能性が強いように思われる。

墨書された文字は判読できる35例のうち、29例が一個体に一文字で雨堤遺跡の26-5の「=」の記号を除くといずれも漢字である。また、雨堤例の記号について報告者の島田恵子氏は陰陽道の呪術との関連を想定されている。その他、一個体の二箇所同一文字「大」を施す例が若宮遺跡H6号住居址から、既出資料であるため、図示していないが「長」を施す例が佐久市中込の南鷲の宮遺跡から発見されている。二文字以上記して熟語を形成しているものには御代田町野火付遺跡の「大田」「大工」「八科〇」、芝間遺跡の「上品」などがみられ、野火付報告で堤隆氏は、「大

田」を大きな田、「大工」を地名、「八科〇」を吉祥的な意味をもつものと想定されている。いざれにしても2文字以上記される墨書土器が野火付遺跡に特に集中する傾向は、遺跡の特異性を想起させ、興味深い。この他に、文字の意味について積極的に考証した文章は少なく、筆者自身もまとまった考えはもっていない。但し、本遺跡の「井」に関して言えば、水と深い関わりをもっていることは想像に難くなく、当時の人々の自然に対する信仰的な性格をもっているように思えるのである。

以上、佐久地方の墨書土器を集成し、種別・器種別・時代別、遺構別等の傾向を指摘してきたが、これらは結果的に14年前に発表された岡田氏の「墨書・刻書土器小考」を踏襲するものであった。資料的な制約が多い当時の状況下で、卓越した論考を草された岡田氏に今更ながら敬意を表したい。

(小山)

註

- 1 菊池清人 1986 「ハッ岳崩壊の原因と南牧湖・小海湖の生-第五節平安時代」『南牧村誌』
- 2 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
佐久市教育委員会 1984 『若宮遺跡』
御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 3 前掲註 2
- 4 前掲註 2
- 5 前掲註 2
- 6 須恵器と土師器の伴出率で時間差が把握される可能性もあることが指摘されている。例えば佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『芝間』
- 7 岡田正彦 1973 「墨書・刻書土器小考-長野県下出土例を中心として-」『信濃25-4』
- 8 佐久地方における灰釉陶器の流入は斎藤孝正氏が10世紀前半に比定される光ヶ丘1号室期から爆発的に増大する。
- 9 1は回転糸切り未調整、2は回転糸切りのち回転ヘラケズリ、3は回転糸切りのち周縁部手持ちヘラケズリである。
- 10 前掲註 7
- 11 小諸市教育委員会 1980 『関口B』
- 12 佐久市教育委員会 1985 『持師屋遺跡』 報文中で土器群についての位置づけは内容に不足器種が多い資料であるため、奈良末〜平安初と漠然としていたが、堤 隆氏の分析では8世紀第3四半期に比定されるという。
- 13 堤 隆氏の御教示による。
- 14 長谷川 厚 1981 「古代における文字資料の一試論」『史観 104』
- 15 前掲註 13
- 16 小海町教育委員会 1986 『両栗遺跡』
- 17 前掲註 7
- 18 羽毛田卓也 1986 「佐久市深瀬遺跡群南麓の宮遺跡の表探資料」『佐久考古通信NO 38・39』

第2節 西大久保遺跡

今回の調査によって検出された遺構は土坑1基、風倒木址3基のみである。竪穴住居址等の遺構の検出に至らず、また、検出された第1号土坑からも遺物の出土はなく、性格・所産期等を把握できなかったことは非常に残念であると言わざるを得ない。今回行われた調査は、道路新設に伴うものであり、本遺跡群の東端部について僅か幅約10mの調査を行ったのみであるため、遺跡の主体部を外れたものと思われる。周辺より表採された遺物も打製石斧、土師質土器、中・近世の陶器が僅かに表採されたのみであるが、昭和57年度に佐久市教育委員会によって行われた、「佐久市遺跡詳細分布調査」の際に、打製石鏃、打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器等が表採されており、本遺跡群は縄文時代から中世と長期にわたる複合遺跡であり、特に中世と考えられる遺物が多量に見られることから、該期の遺構の存在が予想される。

以上、今回の調査のまとめを行ったが、今後の調査によって、本遺跡群に展開する集落の一端が僅かでも明らかにされることを期待したい。

(三石)

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1972 「北近津・戸坂」
竹内 恒・土屋長久 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌 13号』
岡田正彦 1973 「墨書・刻書土器小考」『信濃52-4』
千葉県土地公社 1975 「八千代市村上遺跡群」
山田遺跡調査会 1977 「山田水呑遺跡」
佐久市教育委員会 1978 「上板井北」
小諸市教育委員会 1980 「関口 B」
長谷川 厚 1981 「古代における文字資料の一試論」『史観 104』
小諸市教育委員会 1981 「五ヶ坂」
小諸市教育委員会 1983 「曾根城遺跡」
佐久市教育委員会 1984 「若宮遺跡」
望月町教育委員会 1984 「竹之城原遺跡」
佐久市教育委員会 1985 「跡師屋遺跡」
小諸市教育委員会 1985 「宮ノ反遺跡」
群代田町教育委員会 1985 「野火付遺跡」
小面町教育委員会 1986 「栲楯遺跡」
佐久埋蔵文化財調査センター 1986 「芝間」
玉口時雄 1987 「墨書土器—特集考古学と出土文字—」『季刊 考古学 18号』
斎藤 忠 1987 「墨書土器研究の意義—特集考古学と出土文字—」『季刊 考古学 18号』



高師町遺跡群・西大久保遺跡群付近航空写真 (東洋航空事業株式会社撮影C6-11)



1 高師町遺跡全体写真（南方より）



2 第1号特殊遺構（北方より）



1 第1号特殊遺構遺物出土状況



2 第1号特殊遺構遺物出土状況



12-1

3 第1号特殊遺構出土土器



12-2

4 第1号特殊遺構出土土器



12-3

5 第1号特殊遺構出土土器



12-4

6 第1号特殊遺構出土土器



12-5

7 第1号特殊遺構出土土器



1 第2号特殊遺構（北方より）



2 第2号特殊遺構遺物出土状況



3 第2号特殊遺構遺物出土状況



1 第2号特殊道槽出土土器

13-1



2 第2号特殊道槽出土土器

13-2



3 第2号特殊道槽出土土器

13-3



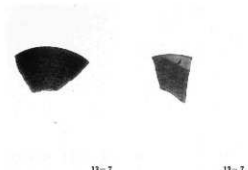
4 第2号特殊道槽出土土器

13-4



5 第2号特殊道槽出土土器

13-5



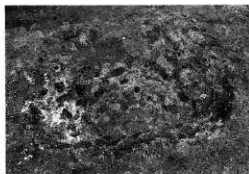
6 第2号特殊道槽出土土器

13-7

13-7



1 第1号整穴状遺構



2 第1号土坑(東方より)



3 第2号土坑(東方より)



4 第3号土坑(北方より)



5 第1・2号溝状遺構(南方より)



6 第2号溝状遺構出土石片



1 A地区全景 (南方より)



2 B地区全景 (北方より)



3 C地区全景 (北方より)



4 D地区全景 (北方より)



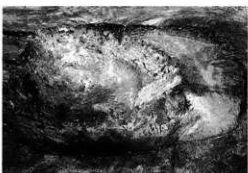
5 第1号土坑 (南方より)



6 第1号風倒木址 (南方より)



7 第2号風倒木址 (南方より)



8 第3号風倒木址 (南方より)

佐久埋蔵文化財調査センター報告書	第1集	『西裏・竹田峯』
〃	第2集	『池畑・西御堂』
〃	第3集	『芝間』
〃	第4集	『新町Ⅱ』
〃	第5集	『宿上屋敷 下川原・光明寺』
〃	第6集	『淡瀬・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・ 曲尾Ⅰ』

佐久埋蔵文化財調査センター報告書第7集

高師町遺跡群 高師町遺跡
 長野県佐久市 西大久保遺跡群 西大久保遺跡

1987年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター
 発行者 長野県佐久市教育委員会
 印刷所 ほおずき書籍株式会社

